

# 『学び合い』における教師の見取りと学習評価の事例的研究

○大坪 宏至 (上越教育大学教職大学院)  
西川 純 (上越教育大学教職大学院)  
([j285704k@myjuen.jp](mailto:j285704k@myjuen.jp))

## 要約

本研究の目的は、『学び合い』授業を実践している者は、『学び合い』授業を実践していない者と比較して、どの程度の見取りに違いがあるのか、インターベンションによる教師の見取りの類型を利用して、明らかにすることである。それによって、教師の見取りの質を高める教員研修において効果的な方法を開発することもできるようになる。

キーワード：『学び合い』、見取り、学習評価

## I 問題の所在

中央教育審議会「論点整理」(2015)において、2030年の社会とその先の社会に生きる子どもに必要な育成すべき資質・能力の要素が、知識に関するもの、スキルに関するもの、情意(人間性など)に関するものの三つに大きく分類された。「何を知っているか、何ができるか(個別の知識・技能)」、「知っていること・できることをどう使うか(思考力・判断力・表現力等)」、「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか(学びに向かう力、人間性等)」を「三つの柱」として各教科等の文脈の中で身に付けていく力と、教科横断的に身に付けていく力とを相互に関連付けながら育成していく必要があると述べている。<sup>1)</sup>

この具体的な改善方策の1つが、アクティブ・ラーニングである。このアクティブ・ラーニングという言葉は、中央教育審議会(2012)において、「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的 能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。」と定義されている。<sup>2)</sup>

西川純(2016)は、アクティブ・ラーニングの1

つとして『学び合い』を提唱している。『学び合い』とは、「一人も見捨てないという一貫した願い」のもと、「学校は、多様な人と折り合いをつけて自らの課題を達成する経験を通して、その有効性を実感し、より多くの人が自分の同僚であることを学ぶ場」であるという学校観と、「子どもたちは有能である」という子ども観の2つの考えから『学び合い』の授業は導かれると述べている。<sup>3)</sup>

また、中央教育審議会「論点整理」(2015)において、学習評価の重要性についても述べている。これは、学校教育法が規定する三要素(「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「主体的に学習に取り組む態度」)を踏まえて整理していく必要があるということ。そして評価に当たっての留意点等で、現在の「関心・意欲・態度」の評価に関しては、例えば、正しいノートの取り方や挙手の回数をもって評価するなど、本来の趣旨とは異なる表面的な評価が行われているとの指摘もあり、

より主体的な学びの過程の実現に向かっているかどうかという観点から、学習内容に対する子供たちの関心・意欲・態度等を見取り、評価していくことが必要であると述べている。<sup>4)</sup>

つまり、教師の見取りが重要になってくる。この見取りについて、松友(2015)は、学習者の主体的で協働的な学習を生み出すためには、教師の意図的かつ効果的な介入(インターベンション)が必要であると述べ、インターベンションの基本類型から教師の見取りの類型と基盤となる情報を図にま

とめた。<sup>5)</sup>

そこで、どの程度の学習評価ができるのか、『学び合い』授業を実践している者と、『学び合い』授業を実践していない者とを比較して、見取りにおいて違いがあるのか明らかにしていく。その結果、教師の見取りの質を高める教員研修において効果的な方法を開発することもできるようになるのではないかと考える。

## II 研究目的

本研究の目的は、『学び合い』授業を実践している者は、『学び合い』授業を実践していない者と比較して、どの程度の見取りに違いがあるのか、インターベンションによる教師の見取りの類型を利用して、事例的研究として明らかにすることである。

## III 研究方法

1 調査対象 学校教員

2 調査期間 2016年11月から12月

3 調査方法

- ・アンケート調査を行った。
- ・許可をいただいた教員には、インタビューを行った。

4 分析方法

松友(2015)による、教師の見取りの類型に分類を行う。<sup>6)</sup>

### A 学習者個人

1 分析的

- ①国語学力に関する理解
- ②言語活動を支える方法的知識の体系的理解

2 長期的

- ①言語力の発達に関する理解
- ②複数学年を担当するなど系統化された指導経験

3 内面的

- ①学習態度や同期付けに関する理解
- ②学習者個々人の日常的な学習状況に関する情報

### B 学習集団

1 分析的

- ①コミュニケーション状況に関する理解
- ②学習者の参加率への意識

2 長期的

①学習集団作りに関する理解

②多様な担任経験とクラス作りのノウハウ

## C 授業展開

1 分析的

- ①学習速度(個人差)への意識
- ②学習時間や空間作りの技術

## IV 結果・考察

調査・分析中のため、学会当日に発表する。

### 引用・参考文献

- 1) 文部科学省：「教育課程企画特別部会における論点整理について(報告)」, p10-11, 2015, [http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2015/12/11/1361110.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2015/12/11/1361110.pdf)
- 2) 文部科学省：「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)用語集」, p37, 2012, [http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048\\_3.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_3.pdf)
- 3) 西川純：「資質・能力を最大限に引き出す『学び合い』の手引き」, p72-83, 2016
- 4) 前掲1) p20-21,
- 5) 松友一雄：「国語科授業における教師の「見取り」とインターベンション ～効果的なインターベンションを生み出す即時的評価～」, 国語教育研究, 56号, p86-95, 広島大学教育学部国語教育会, 2015, <http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/ja/00039483>
- 6) 前掲5)